早稲田大学 2023年度
一般選抜 法学部

国語

（問題）

2023年度

〈R05172012〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～15ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	◎悪い	◎悪い
マークを消す時	◯良い	◎悪い	◎悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	
0	
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	

（4）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）

3825番

⇩

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。

8 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

9 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

10 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

中比の事にや、中納言顕基、室の遊び人を思ひていみじくいひかはして侍りけるが、いかなる事かありけん、かれがれになりゆきて、もとの室の泊りへなん返し送りける。

この女、母なりける者にいふやう、「これへもまうで来まじく侍りつれども、その生きておはせんほどは、いかでかと思ひて、a つれなく、再び故郷へなん向き侍りぬるなり。これにはありとも、さきざきのやうなる振舞は、今はし侍るまじきなり。その心をえ給へ」とて、ふつと外出でもせず、つねには心を澄まして念仏をぞ申しける。親もしばしこそは諫めけれ、後にはとかくいふことなし。かかるほどに、日に添へて家のさまいふかひなくなりゆきけり。されども、驚く気色もさらになし。

さるほどに、母、病して死ぬ。(注1)積り来る七日ごとに、うち驚かす鐘の音もえ A ほどになんありければ、常にはさめざめと泣き居るよりほかの事なし。まれまれ付きたる者も、忌みにことよせて、いづちやらん行き散りぬ。

かくて四十九日もすでに明日になりにけり。その夕方、物あまた積みたる船なん侍りける。この女、あやしのものひとり具して、この船に乗りぬ。この船は、中納言のもとに下ざまに使はれける者の、ゐなかに遣られたりけるが、上りけるなるべし。さて、この船の主、驚きて、「これは、それがしが候ふ船なり。1 いかでか乗せ奉らん。さは知ろしめしたりや」といひければ、「知りたるなり。などてかは苦しかるべき」とて乗りぬ。さて、翌朝、(注2)まことのもの五十取らせたりけり。この女、帰るとて、2「親の孝養は今日なんし果てつ」とて、髪を切りて、うち置きて出でぬ。

さて、その日の仏事どもして、日ごろありつる者どもに分かち取らせなどして、我が身はやがてその日出家して、静かなる所占めて、いみじく行なひ侍りける。

さて、この船の者、京に上りて、「かうかうの事侍りし」と中納言にいひければ、「さればよ、b うるせしと見し者は、なほうるせかりけるものかな。あはれ少なく取らせたりけるものかな。同じくは百取らせよな」とて、涙ぐみ聞こえられける。

さやうの遊び人となりぬれば、さるべき前の世の事にて、いかなれども恥はみてこそ侍るを、3「あぢきなし、よしなし」と思ひ定めけん事、類なく侍るべし。人に忘らるる人はみな、恨みにまた恨みを重ねつつ、罪になほ罪を添ふる事にて侍るを、ひたすら思ひ忘れて、憂き世を遁るる中だちとしけんこと、いといみじう覚え侍り。妙なりと見し人の、恨みの心に耐へずして、恐ろしき名をとどめたる事は、あがりてもあまた聞こゆるに、(注3)あまさへ、世を厭ふしるべとせん事は、なほ類なかるべし。

中納言は、いみじき往生人におはしけると、往生伝にも侍るめれば、さるべき事にて、4 驚かれぬ袂にも染めかしとて、秋風も吹き初めけるやらん、とまで覚ゆ。

(慶政『閑居友』による)

(注1) 積り来る～鐘の音……七日ごとに時の経過を知らせる鐘の音。

(注2) まことのもの……ここでは金品を指す。

(注3) あまさへ……「あまつさへ」に同じ。

問一　傍線部a「つれなく」、傍線部b「うるせし」の指す内容として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

a「つれなく」

イ　不愛想に
ロ　不本意にも
ハ　退屈そうに
ニ　人目を気にせず
ホ　平然とした様子で

b「うるせし」

イ　計算高くけちくさい
ロ　騒々しく口うるさい
ハ　信心深く教養がある
ニ　頭がよくたしなみがある
ホ　些細なことを一々気にする

問二　空欄 **A** に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　かなはぬ
ロ　かなはん
ハ　かなふべき
ニ　かなふなる
ホ　かなひぬる

問三　傍線部1「いかでか乗せ奉らん。さは知ろしめしたりや」について、船の主がこのように発言したのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　金も払わない者が船に乗ることを認められないということを、相手が了解していないのではないかと考えたから。
ロ　貴族の所有の船に卑しい者を連れた人間を乗せられるはずがないことを、相手が自覚していないのではないかと考えたから。
ハ　乗ろうとしている船の所有者が相手の昔の愛人であった顕基であることを、相手が認識していないのではないかと考えたから。
ニ　船の所有者の顕基が許可しないかぎり、船に乗せるわけにはいかないが、相手のことを顕基が承知しているわけがないと考えたから。
ホ　荷物を積んだ船に、盗みをしかねない貧しい人間を乗せられるはずがないことを、相手が理解していないのではないかと考えたから。

問四　傍線部2「親の孝養は今日なんし果てつ」について、女がこのように考えたのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　その日、四十九日を迎えたことで、死んだ母親の法要にも一区切りつくと考えたから。
ロ　故郷にずっととどまって法事を続けたことで、死んだ母親の供養も果たせたと考えたから。
ハ　一晩船に居座ったことで、自分を捨てた顕基を恨んでいた母の想いを果たせたと考えたから。
ニ　船の中で一晩中念仏をとなえたことで、最期まで面倒をみるという母親との約束を守れたと考えたから。
ホ　家族の不遇の原因であった顕基の船の者から金品を得たことで、母への親孝行が完遂できたと考えたから。

問五　傍線部3「あぢきなし、よしなし」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　味わい深い、悪くない
ロ　むなしい、無益なことだ
ハ　つらい、対処のしようがない
ニ　不満がない、心配する理由がない
ホ　うまくいかない、生きる甲斐がない

問六　傍線部4「驚かれぬ袂にも染めかしとて、秋風も吹き初めけるやらん」の表す内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　顕基が世の無常を感知している者だと知っていたからこそ、女も彼に対して思いをかけたのだろうか
ロ　生きることのきびしさ、むなしさが心にしみるように、仏は二人の心にすきま風を吹かせたのだろうか
ハ　現世のむなしさに気づいた者たちの心にも伝わるように、季節の移ろいを示す秋風が吹き出すのだろうか
ニ　無常に気づくことのできない女の心にも分かるようにと、顕基は女と距離をとるようになったのだろうか
ホ　世のはかなさに袂を濡らすような女性だと分かっていたために、顕基は女性の面倒をみるようになったのだろうか

問七　この文章の内容に合致するものを、次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

イ　女は一晩を過ごした船の持ち主が顕基であると知って、船の主から得た金品を、そのまま置いて船を去った。
ロ　女は船を去る際に髪を切り、まわりの者に金品をあたえて母親の四十九日の仏事をまかせ、そのまま出家した。
ハ　女が故郷にもどった後、女の家はどんどん貧しくなり、母親の死後は物忌みを言い訳に従者たちもいなくなった。
ニ　女は顕基のもとを離れて故郷に帰り、母親に今後の生活を支えることを約した後、ひたすら念仏を唱えつづけた。
ホ　世のつらさに恨みをつのらせる生き方は間違っており、顕基と別れた後、仏道に目覚めた女の生き方はすばらしい。
ヘ　顕基は女に未練があり、船の者から船での一件を聞いて、女に金品五十ではなく、百与えるべきであったのにと悔いた。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

象犀・珠玉・怪珍之物、有悦於人之耳目而不適於用。金石・草木・糸麻・五穀・六材、有適於用。而用之則弊、取之則竭。悦於人之耳目而適於用、用之而不弊、取之而不竭、賢不肖之所得、各因其才、仁智之所見、各随其分、

A 不同、而求無不獲者、惟書乎。

自秦漢以来、作者益衆、紙与字画日趨於簡便、而書益多、世莫不有。然学者益以苟簡、何哉。余猶及見老儒先生。自言其少時、欲求史記・漢書而不可得。幸而得之、皆手自書、日夜誦読、惟恐不及。近歳市人転相摹刻、諸子百家之書、日伝万紙、学者之於書、多且易致如此。其文詞学術当倍蓰於昔人。而後生科挙之士、皆束書不観、游談無根、此又何也。

余既衰且病、無所用於世。惟得数年之閑、尽読其所未見之書、而廬山固所願游而不得者、蓋将老焉、尽発公択之蔵、拾其余棄、以自補庶有益乎。而公択求余文以為記。乃為一言、使来者知昔之君子見書之難、而今之学者有書而不読為可惜也。

（蘇軾「李氏山房蔵書記」による）

注　象犀……象牙と犀の角。　怪珍……珍しくて貴重の意。　六材……弓を作るのに必要な六種類の材料。
摹刻……翻刻・印刷すること。　倍蓰……倍から五倍に増える意。
廬山……長江の中流域にある山の名で景勝地として知られる。この文の主題である李氏山房（蔵書楼）が建っている場所。
公択……作者の知人で廬山に蔵書楼を建てた李常（公択は字）のこと。

問八　空欄 A に入る二字の語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　才分　　ロ　用取　　ハ　弊竭　　ニ　適用　　ホ　耳目

問九　傍線1「求無不獲者、惟書乎」の書き下し文（ただし全文ひらがな表記）として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　なきをもとめてえざるものは、これしよなりや。
ロ　もとめなくえざるものは、おもふにしよなるか。
ハ　えざることなきをもとむるものは、ただしよのみ。
ニ　もとめてえざることなきものは、ただしよのみなるか。
ホ　えざるものをなからしめんともとむれば、これしよならんや。

問十　傍線**2**「当倍蓰於昔人」は、「昔の人々よりきっと倍から五倍に増えているに違いない」という意味である。この意味に沿うように、記述解答用紙の**問十**の文に**返り点のみを記入せよ**。振り仮名・送り仮名は付けないこと。

当　倍－蓰　於　昔　人

問十一　傍線**3**「使来者……可惜也」の内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　昔の君子が手にすることの難しかった書物を今の学問する人々はたやすく手に入れているのに全く読むことをせず、ひたすら蔵書の数量を誇示するばかりであることを、蔵書家の人々に知らしめたい。

ロ　昔の君子は書物を手に入れて読むのがとても困難であったのに対し、今の学問に志す人々は書物を簡単に手に入れられるのにしっかり読まず、それがいかに残念なことであるかを将来の人々に理解させたい。

ハ　昔の君子は新しい書物を入手することが難しく、今の学問する人々はたやすく書物を入手できるのに手で触って珍重するばかりで中身を読まなくなったことの弊害を、この蔵書楼を訪れた人々に気づかせたい。

ニ　昔の君子が著した書を理解するのがいかに難しいかを気づかせ、今の学問する人々のようにろくに書も開かず分かったふりをしていることがいかにいい加減であるかを、将来この文を読んだ人々に知らしめたい。

ホ　昔の君子は書物の中でしか出会えず、その思想に触れることが難しい対象なのに、今の学問に志す人々は書物があっても読まないので、古に学ぶという学問で最も大切なことを実行できなくなっていることを、若者に気づかせたい。

問十二　本文の内容に**合致しない**ものを次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

イ　象牙や犀の角等の貴重品は人の目や耳を楽しませてくれるものだが、実用には不向きなところがある。

ロ　科挙及第を目指す者たちは書物が簡単に手に入る気安さから、かえって勉強そっちのけで世俗の四方山話にうつつを抜かしている。

ハ　今の世では、諸子百家でさえ日々沢山の印刷本が出回り、そのため書物を手に入れることが昔と比較にならないくらい容易になった。

ニ　秦漢より後、紙が普及し、漢字の字画も簡便になり、書き手も多くなり、書物は増えつづけたが、学問する人は書物を軽く扱うようになった。

ホ　金石・草木・糸麻等の物は、使いつづければ消耗し、やがてはなくなってしまうものだが、実用に向いているのみならず、目や耳をも十分楽しませてくれる。

ヘ　一昔前の儒者は、『史記』や『漢書』のような基本的書物ですら、容易には手に入れられず、幸運にも入手できたら、日々寝る間を惜しんで暗記に努めたものだった。

ト　蔵書楼のある廬山は遊覧に出かけたいと願いながら果たせずにいた場所であるから、暇さえできれば出かけていって、まだ読んだことのない書物を読み尽くしたい。

（三）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

他者の「すがた」に接するとき、私はそこに「こころを隠したからだ」を見るのではなく、「こころある存在」そのものと出会っている。この出会いの可能性にひらかれた存在の仕方こそ、「魂」と呼ぶべきものなのである。ウィトゲンシュタインはそうした「すがた」としての「魂」を、次のような美しい言葉で表現していた。

人間のからだは、人間の魂の最良の像である。（『探究』）

考えてみれば、私たちは日々互いの「からだ」を映しあいながら暮らしているにもかかわらず、そこに「魂」としての「すがた」が現れていたことに気がつかない。背が高いとかピアノが巧いなどという「目に見える」からだに気を取られて、「こころで見る」その人の存在そのものの重さを見過ごしてしまう。そして、その相手が失われたときに慌てて、その「すがた」を探し求め、魂に向きあおうとする。『星の王子さま』のキツネもそんな私たちのアイマイな「魂」に対する態度」を、戒めていたのである。

死別という経験において、私たちは否応なしにその他者が「すがた」としてあったことを思い知らされる。しかもそれは皮肉なことに、その「すがた」が破られ、いわば「からだ」であることが暴き出される、という仕方において、告げ知らされるのである。もちろん死者も、例えば遺体というような「すがた」において現れているのであるが、しかしそこでは生ける者どうしとしての「すがた」と異なり、生きた「呼応性」が見失われてしまう。触れることが、触れられることであり、見つめることが見つめられることであるような相即性の糸が弛緩し、またその「すがた」は痛ましく、生きている私の「鏡像」としてはあまりに虚ろなものに見えるかもしれない。

だが、死者はそのまま「すがた」を滅ぼしてしまうわけではない。確かにそれは生前のように触れあい、見つめあい、語りあう「からだ」ではない。しかしながら、私たちはそのように変わってしまう死者の「からだ」を捨ててしまうのではなく、その文化に応じた丁重さで弔うだろう。そこには一貫して消えることなく、しかし形をかえながら、その「からだ」の影が繋がっている。そして[1]私たちは、その影をよすがとしつつ、新たな他者の「すがた」を再建しようとしてきたのではないだろうか。

その新たな「すがた」は、決して「からだのないこころ」のような、抽象化された精神作用のようなものではない。[a]、生前の「からだ」と同じような全体を保ち、私の「からだ」と呼応することはありえない。[b]、何らかの意味で「からだ」でありつつ「こころ」であるような、具体的な場において、それは「魂」として私と応じあう存在になる。

だが、私たちの生きるこの時代においては、[2]そのような「具体的な場」が貧しくなっている。死が医療に取り囲まれ、日常から分離されるようになるまで、死はいつでも生の傍らにあり、死者は生者の周囲に存在した。慰霊や追悼は廻る歳月に組み込まれたリズムであり、祈りは日常の仕草に他ならなかった。しかし、生者も死者も厳密な情報／事物として管理され処理される現代の社会装置において、死者は私たちの「明るい生活空間」からは「ないもの」として取り除かれてしまう。死者は「からだ」を奪われた抽象的な「こころ」として、生ける個人の「こころ」に密封されてしまうのである。

グリーフケア(注)は、そうした死者を解放し、その「すがた」を世界の中へと呼び戻して共有しようとする営みであるべきだろう。そのためには、世界の側に「箱」となるような「具体的な場」を紡ぎ出してゆかねばならないだろう。ただ、結果として喪失の当事者が、自分の「こころ」の中にそのひとの「すがた」をおさめてそれを語らずとも安寧な日々を過ごせれば、それはそれでよいのだし、従来型の葬祭や墓所、仏壇のようなかたちを通じて死者と対話できれば、それ以上のものを求める必要もないだろう。問題となるのは、そのような対話の場所へと休らうことの難しい複雑な悲嘆の事例であり、また死別そのものの事情はとりわけ複雑でないものの、それをおさめる場所を見失っていたり、そこに違和感を持ったりしている事例である。そして現代においては、後者のような事例が見過ごせないほどに増えているのではないだろうか。

さて、そのような「具体的な場」とはどのようなものか。まずもってそれは、死者の「すがた」を「こころ」という密閉空間から呼び起こすことのできる場、でなくてはならない。それを媒介するものはやはり「言葉」による表現、す

なわち「語り」ということになろう。しかしすでに指摘したように、当事者に一対のかたちで援助者が向き合い、その語りを受け止める方法には、一定の効果とともに特有の限界と困難が付随する。死者という「第三者」を含んだいわば「三角関係」の中で、一対の「対話者」が濃密な関係にあれば、かならずそこから一人が疎外されてしまう可能性があるのだ。自己を語れば死者が沈黙し、死者を語れば自己が見失われる。その葛藤を援助者は受け止めなくてはならないが、堂々巡りの葛藤を前に、どうしても出口へ急ぎ、何らかの指示的なアプローチに頼りたくなるだろう。当事者が感じている悲しみや無力感を癒すために、その当事者の「魂」に働きかけ、そこに「意味」への指向性を与えてゆくことは、苦悩する「生」への雄弁な肯定であると同時に、「死者の魂」について口をつぐみ、援助者という「すがた」に重ねるような自我を頑に再構築しようとする試みに、すり替えられかねないとも危惧される。

この「［ C ］」から抜け出すために必要なのは、上述のような入れ子式の二者関係ではなく、グループの活動の中に開かれた[3]「還流する対話」の仕組みであろう。依存症などの自助グループ活動やナラティヴ・アプローチの方法でも、専門家と呼ばれるような指導的立場の介入を避けて、当事者の語りや、当事者どうしの分かち合いが重視されてきた。しかし、グリーフケアにおいては、自助グループの活動においても講演会や勉強会などにその活動の重心が置かれ、それを基点とした相互交流の場が築かれてきたように思われる。その理由はさまざまあろうが、おそらく当事者同士の「語りあい」だけでは、二者関係におけるケアとは別の意味で、「死者」が言葉の対流にうまく乗ることができず、結果としてまた「こころ」の中に淀んでしまうからなのではないだろうか。どうしてもテーマが「死別」そのものになってしまうと、語りの色合いが単調になってしまうし、それぞれの「死者」への思いが拮抗しあって身動きの取れない状況が生まれ、結果としてその思いが「こころ」の中に錨をおろしたままになってしまうだろう。だから、むしろテーマは多様であったほうがよく、多少の距離をもって「共に聴く」さまざまな話題を媒介として、その中で自然なかたちで「死者」への思いが再発見され、語り出されるほうが、結果としてその人それぞれの死者の「すがた」との再会をサポートすることが可能となるのではないだろうか。こうしたグループには「関心があれば誰でも参加できる」という自由さがある。特別な喪失体験がなくとも、援助者やその活動に興味を持つ人、講師の話を聴きたい人などが混じり合い、それぞれに世界を豊かに広げてゆく場にもなるだろう。興味深いことに、近年ではそうしたグループが互いに連携し、社会に向けて自分たちの苦しみや問いかけを発信しながら、活動の輪を広げている。

こうした活動は、拡散してゆくケアへの志向性を拾い集め、ゆっくりと対話へと還流させ、そしてまた日常へそれを浸透させようとする営みである。それは「向かいあう対話」に比べれば、あたかも地殻の移動のようにゆっくりとした対流であるが、悲しみにある人を「回復」へとせき立てず、その代わりに新しい時間の質のようなもので、支えてくれるだろう。閉じた空間ではなく、伸び広がってゆく世界の中で、距離のうちにふと死者の「すがた」を見いだすことができれば、死者は「こころ」と「からだ」の緊張から抜け出して自由に羽ばたいてゆく。

グリーフケアにおける「スピリチュアルケア」は、死者の魂を「目にみえないもの」として語るだけでは十分とは言えない。本当はそれを「目に見え、からだに感じられる世界」のうちに「すがた」として再発見できるように、援助するものでなくてはならないはずなのである。ただし、ここでの「目に見える世界」とは、私たちが日常において「見ている」と思わされてきた世界、すなわち客観化され、比較計量されて道具的に管理される対象の寄せ集めなのではなく、ありのままに今与えられている「すがた」としての世界の全体のことである。『星の王子さま』が「子どもの純粋なこころ」を取り戻すことを勧めているのだとすれば、そのような世界の「すがた」に出会う姿勢、という意味においてであるだろう。しかしここでも注意しなくてはならないのは、そこに深い意味が生まれるのは、さまざまな喪失や悲嘆を経験し、夢や空想を見失ってきた「大人」であるからこそ、ということである。「だけど、目ではなにも見えないよ。こころでさがさないとね」（『星の王子さま』）と、王子がみずからの口を通じて「ぼく」に語りかけたとき、王子はもはや「子ども」ではなく、バラへの愛に目覚め、こころの痛みを身にしみて味わった一人の「青年」の「魂」において、世界と響きあっていたのである。

「魂」に出会うこと、スピリチュアルな世界観に生きることは、決してこの目に見える世界を「超えた」ものや、そこに「秘匿されたもの」としての神秘にツウギョウ[B]することとイコールではない。もちろんいわゆる宗教的な神秘体験を排除する必要もないが、しかしそれを条件とする必要もない。むしろ、この世に溢れていながら気づかれることのない小さな神秘、偶然の出会いにこころを寄せながら歩むことこそが、[4]多くの人にとっての「等身大のスピリチュアリテ

イ」なのではないだろうか。

「還流する対話の場」は、小さな神秘を言葉のなかで共に拾い集めながら、それを真の意味での「spiritus＝生命の息」として賦活させ共有する営みと言えるだろう。かつて宗教家や熟達した専門家の手に委ねられていたスピリチュアルケアは、今やその裾野を広げ、人が寄り添い、互いに言葉や眼差しを交わしあいながら、支えあって生きる共同性のかたちへと刷新されつつある。そして専門家に求められるものも、求心的なケアの技術のみならず、拡散してゆく悲しみを拾い集め、それを「生きる力」へ還流させるような場の構築力へと広がっていると考えるべきだろう。

（﨑川修『他者と沈黙　ウィトゲンシュタインからケアの哲学へ』による）

（注）グリーフケア……ここは、大切な他者との死別による悲嘆にかかわるケアのこと。

問十三　傍線部A・Bにあてはまる**漢字二字**を、それぞれ記述解答用紙の**問十三**の欄に楷書で記入せよ。

問十四　傍線部1「私たちは、その影をよすがとしつつ、新たな他者の「すがた」を再建しようとしてきた」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　「私たち」は、死者となった他者の「からだ」と触れ合うことができないという現実を乗り越えるために、自分の「こころ」の中にかつてと同じ他者の「魂」を作り直そうとしてきた、ということ。

ロ　「私たち」は、他者の死の悲しみを乗り越えるために、目に見える「からだ」を通して向き合ってきたその人のかけがえのない「魂」と、それまでとは異なるやり方で出会い直そうとしてきた、ということ。

ハ　「私たち」は、他者の死がもたらす心の空白を埋め合わせるために、それぞれの文化的な慣習にもとづく葬送の儀礼を通じて、死者たちの「魂」を具体的な像として表現しようとしてきた、ということ。

ニ　「私たち」は、他者の死の衝撃から立ち直るために、「こころある存在」としての死者の「すがた」と向き合ってきた経験を土台として、それまでとは異なる他者の「魂」を見つけ出そうとしてきた、ということ。

ホ　「私たち」は、他者の「からだ」から生命が失われていく現実と向き合うために、これまで目にしてきた他者の「すがた」の背後に、自らの鏡像ではない他者の「魂」の真実を探りあてようとしてきた、ということ。

問十五　空欄 a ・ b にあてはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　a　たしかに　b　さらに
ロ　a　けれども　b　ゆえに
ハ　a　もちろん　b　しかし
ニ　a　あるいは　b　つまり
ホ　a　そもそも　b　ただし

問十六　傍線部2「そのような「具体的な場」が貧しくなっている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　社会の近代化が進んだ結果、日々の暮らしの中で生者が死者と対話的にかかわることの重要性が見失われてしまった、ということ。

ロ　死をめぐる判断が医療に委ねられたことで、人々が他者の死と向き合う経験が、家族という単位に分断されてしまった、ということ。

ハ　人々の生活空間から「死」が排除されたことで、日常的に死者を想起し、悲しみを新たにできる場所が失われてしまった、ということ。

ニ　人間の生死が情報として管理されるようになった結果、親しい他者の死を悼むことの大切さが理解されにくくなってしまった、ということ。

ホ　近年になって巨大な災害や事故が頻発した結果、従来型の慰霊や追悼の儀式では死別の悲しみを癒すことができなくなってしまった、ということ。

問十七　空欄 c にあてはまる語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　意味のイデオロギー
ロ　第三者のジレンマ
ハ　悲しみのレトリック
ニ　対話のパラドクス
ホ　当事者のエゴイズム

問十八　傍線部3「「還流する対話」の仕組み」とあるが、なぜそのような「仕組み」が求められるのか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　当事者と支援者とが対話を重ねていく中で、死者に対する一方的な意味づけが行われることを避けるためには、さまざまな経験を知るケアの専門家の話を聴くことが重要だから。
ロ　専門家ではない他者による死者の「すがた」についての語りを共に聴く経験は、当事者の「こころ」の負担を軽減し、当事者が知らなかった死者の像をよみがえらせることにつながるから。
ハ　死者に対する強い思いに囚われている当事者にとっては、直接「死」をめぐって語り合うことよりも、同様の悩みを抱えた人々と共に過ごす時間そのものが心の安らぎをもたらすから。
ニ　死別の悲しみとは直接かかわらない話題に触れることがかえって、それぞれの当事者の中に埋もれていた記憶を引き出し、死者との向き合い方を再考するきっかけとなり得るから。
ホ　それぞれの当事者が死者と過ごした思い出を改めてことばで表現し、広く社会に向けて発信していくことで、死別の悲しみが自分だけの問題ではないと実感できるようになるから。

問十九　傍線部4「多くの人にとっての「等身大のスピリチュアリティ」なのではないだろうか」とあるが、「等身大のスピリチュアリティ」が重要である理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　「目に見え、からだに感じられる世界」の中にひそむ死者の「魂」と語らうためには、人々が共に祈ることを通じて、死者への呼びかけを続けることが必要だから。
ロ　日々の暮らしの中で経験される出来事をささやかな奇跡と受けとめる感性を大切にすることで、「この目に見える世界」で生きる意味を感じとれるようになるから。
ハ　分析を通じて「客観化」された「世界」とは異なる生の現実を見出すためには、親しい人の「魂」と出会い、語り合えたこと自体に感謝する姿勢が不可欠だから。
ニ　他者のなにげない言葉に秘められていた「深い意味」に気づく経験を通じて、共同体の中で人々が寄り添い、支えあって生きることの大切さを確認することができるから。
ホ　かつては宗教家たちが行っていた死者の「魂」との交流を身近なものとすることで、「「すがた」としての世界」が存在することの「神秘」を実感できるようになるから。

問二十　問題文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　目に見える世界にしか関心を持たない人々は、互いの「からだ」に潜む内なる「魂」の存在に気づくことができないため、死者の悲しみと時間をかけて向き合うことの意味を忘れてしまう。
ロ　親しい人との離別は決定的な喪失として意識されるが、その経験を新たな他者との対話を始めていくきっかけに変えることができれば、その人は回復に向けた一歩を踏み出したことになる。
ハ　グリーフケアの専門家に求められるのは、当事者の悲しみに粘り強く寄り添い、その人と死者との関係に適切なことばを与えることを通じて、日常への復帰をそっと後押しすることである。
ニ　『星の王子さま』の物語が重要なのは、さまざまな別れを経験し、現実の厳しさをよく知る「大人」たちの方が、先入観なしにこの世界と向き合うことができると教えてくれるからである。
ホ　死別の悲しみはすぐに癒えるものではないが、当事者が囚われている死者の「すがた」を相対化することは、その人が新たな世界を受け入れていく土台を作ることにつながっている。

（四）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

モースの『贈与論』が描き出す世界が、「贈与のモラル」という言葉がややもすればそうした印象を与えるようなナイーヴなものでも平和なものでもないということは、この著作を一読すれば明らかである。その意味では、彼が『贈与論』に集約される一連の研究を、gift という語が持つ二つの相反する意味についての文献学的考察によって始めていることを思い出しておくことは重要である。「ギフト、ギフト」と題されているこの論文は、同じ一つの単語のカンマをはさんだ繰り返し（しかし、はたしてそれは同じ単語の繰り返しなのだろうか、それとも一方はドイツ語、もう一方は英語、あるいはまたオランダ語なのだろうか）によってすでに十分に象徴的であるが、次のように書き出されている。

さまざまなゲルマン語系の言語で、ギフト（gift）という一つの単語が「贈り物」という意味と「毒」という意味と、二つの意味を分岐してもつようになった。この二つの意味は非常に隔絶しているように見えるため、どのようにして一方の意味から他方の意味へと遷移が生じたのか、また、この二つの意味にはどのような共通の源泉があるのか、語源学者たちは理解に苦しんでいる。

相反する二つの意味のこの謎めいた共存は、古代ゲルマン系社会における給付の典型が飲み物の贈与、とりわけビールの贈与であったことを想起するなら、もはや謎ではなくなる、とモースは言う。というのも、これらの社会では、「贈与はもっぱら飲み物をみんなで一緒に飲むとか、酒宴を奢るとか、お返しの酒宴を開くとかいったかたちでなされるわけだけれども、こうしたときほど、贈り物が善意にもとづくのか悪意にもとづくのかの見きわめがつかなくなる場合はほかにない」からだ。たしかに、たいていの場合、それらは無害な飲み物にすぎない。しかし、「それが毒になりうる可能性はつねにある」。この可能性は、贈り物の受け取り手が感じるある種の不安に、物質的なともいえる根拠を与えており、たしかに対立する二つの意味の共存をわかりやすく説明している。しかし、1 ある一群の言語が、贈り物を表す語に対して、明らかに相手を害するものという意味を結びつけている本当の理由は、じつはそれよりももう少し深いところに、すなわちモースが贈与のもっとも本質的な機能と見なしていたもののうちに潜んでいる。

彼が研究対象とした社会においては、人と物とが渾然一体となって絶え間なく循環しているが、その循環を生み出しているのは、通常、クラン（注）同士、家族同士、個人同士のあいだに取り交わされる無償の贈与やサービスの交換である。これがモースによって「全体的給付の体系」と呼ばれるものである。だが、そこで贈与が果たしているもっとも大切な機能は、財そのものの交換や、モノの流通それ自体ではない。それは「人と人を結びつけること」である。「贈り物を受け取るということ、さらには何であれ物を受け取るということは、呪術的にも宗教的にも、倫理的にも法的にも、物を贈る側と贈られる側とにある縛りを課し、両者を結びつける」。贈り物は理由なく受け取りを拒むことはできないし、受け取った贈り物になんのお返しもしないでいることもできない。モースによれば、それこそが贈り物を受け取ることに対して私たちが今日でも依然として喜びと同時に不快を感じずにはいられない理由である。贈与についてのモースの考察は、この「不快」感と分かちがたく結びついている。

しかし「社会主義者」モースにとって、人々が互いに関係づけられること自体が否定の対象になることはない。問題は2 この関係づけがすぐれて闘技的であるという点にある。

モースによれば、贈与の体系を構成しているのは以下の三つの義務である。「贈り物をする義務」「それを受け取る義務」「それにお返しをする義務」。このうち、体系の根幹をなしているのは第三の義務、すなわち「お返しをする義務」である。この義務の存在なしには、贈与は体系を構成することはできず、単発的な行為の連鎖を生むだけである（言い換えれば、この第三の義務こそが贈与を一つの「交換体系」たらしめている。だからこそモースは贈与についての自らの研究を「プレゼントにお返しをする義務についての研究」と呼ぶのである）。この義務の特徴は、それがもらったものと同じもの（等しい価値を持つもの）を返すことにはとどまらないということにある。少なくとも、モースが集団的交換における「ひときわ注目すべき形態」と見なした形態においてはそうである。アメリカ北西部とメラネシアの諸部族のあいだに広く分布している問題の形態は、民族誌学者たちによって一般に「ポトラッチ」と呼ばれてきた。この形態は以下の二点によって特徴づけられる。

実際のところそこでは、ありとあらゆる種類の給付が山のように取り交わされるのであるけれども、そのはじまりはというと、ほとんどすべての場合、プレゼントを純粋に無償で贈与するという装いをまとっていること、にもかかわらず、その贈与の恩恵に浴した人には、もらったものと等価のものに、さらに何かを上乗せしてお返しすることが義務づけられるようになること。これが第一の特徴である。したがって、およそどんな取引でも蕩尽と真の濫費の様相を呈することになる。

第二の特徴は、いわば第一の特徴の論理的帰結として現れるその際だった闘技性である。もらったものより多くのものを返すことを互いに続けていけば、いずれは返すことができなくなる。あるいはまた、最初から相手が返すことができないほど多くのものを（たとえば饗宴の形で）贈ろうとすることになる。というのも、「クランは、それぞれがそれぞれの首長を代表として相互に結ばれ合うのだけれども、それ以上に相互に対抗し合う」からである。贈与を通じて表現されるこの恒常的な対抗関係は、競争の敗者を勝者に対して階層的に劣位におく。結果としてそうなるというより、この競合関係はそもそも、そうした社会的階層関係を作り出すことを、言い換えれば、家族間、クラン間のヒエラルキーを確立することを目標としているのである。

ここにはっきりと姿を現している贈与の非友好的な性格をどのように理解すべきだろうか。シルヴァン・ヴィミラは、そこからいわば二つのモラルを引き出している。第一のそれは、[3]階層化、序列化を生み出すメカニズムとしてのポトラッチが、生み出された階層構造に対してきわめて両義的な性格を有していることにもとづく。

闘技的贈与の機能は、今見たようにそれを通じて社会的優位者を作り出すことにあるが、それが一度きりではなく定期的に繰り返されることで、この社会の階層構造をつねに不安定なものにする。すなわち、ポトラッチと階級社会との関係は次のようなものになる。地位の高低による階層構造はポトラッチが存在するための条件をなすが、ポトラッチはこの階層の成員が固定される（階層が一方向的に絶えず強化される）ことを妨げる、言い換えれば、そこに可逆性、流動性を導入するのである。富による階層構造は、ポトラッチが富を絶えず吐き出すよう強いるがゆえに、そのたびごとに解消される（つまり、ポトラッチによる威信の獲得と物質的財の蓄積とは両立しない）。しかも勝者が得る威信は、その「気前の良さ」によるものであるために、敗者に対しても自らの度量の広さを示さなければならない。勝者は敗者に対して支配権を得るが、その支配権は相手に隷属を強いるような形で行使することはできない。それは自らが得た威信の理由（自らの優越性の根拠）である「気前の良さ」に抵触するからである。

第二のモラルは、[4]ポトラッチに代表される闘技的贈与が、現実の戦争（殺し合い）の、文字通りの「代理物」であることにもとづく（「財の戦争」）。贈与を闘争の手段として用いることで、それが行っているのは、共同体間に不可避的に存在する葛藤や紛争が剥き出しの暴力へと、血で血を洗う殺戮へと転化しないように阻止することである。ここで思い出されるのは、カール・シュミットが『大地のノモス』で行っている、「戦争の枠入れ」という議論である。シュミットは、ヨーロッパは過去二百年の間（そしてこの二百年の間のみ）戦争を枠にはめることに成功したという。それは一七世紀中葉から始まる二百年であるが、この枠入れを可能にしたものは、長期にわたる陰惨な宗教的内戦に終止符を打ったウェストファリア条約（一六四八）による領土主権国家体制の確立である。シュミットの主張によれば、世界が領土主権国家によって分割されることの最大の利点は、戦争が少なくとも権利上対等な主権国家間の、しかも正規軍同士のそれへと限定されることにあり、それによって、内戦がしばしばそこに帰結するような絶滅戦へのエスカレートが押しとどめられることにある。シュミットのシニシズムは（彼はそれを真正の政治的感覚と見なすだろうが）戦争の廃絶の可能性を認めない。だからこそ、それを一つの枠の中に閉じ込めることが（そしてそれだけが現実的に可能であるがゆえに）重要なのである。

しかし、闘技的贈与のメリットは、ただ単に剥き出しの暴力の抑止にあるだけではない。それはむしろ、存在している対立、葛藤を、そのまま社会的紐帯、連帯のための手段へと変化させることにある。モースはポトラッチが「暴力や誇示や敵対関係を生む」と書く。だが、そうしたぶつかり合いは実際にはポトラッチに先立ち、またポトラッチとは独立してすでにそれらの社会のあいだに存在している。闘技的贈与という実践は、むしろそのような敵対関係の存在を前提とし、それを利用する形で生み出されたと見るべきだろう。ポトラッチは社会形態学的な現象でもある、とモースは言う。「人々は親密な関係を取り結ぶが、そうしながらも互いによそ者どうしのままである。意志を疎通させ合いながらも、大規模な交易と恒常的な競技では対立し合う」。[5]私たちはここから贈与のもう一つのモラル（第三のモラル）を

引き出してもよいはずである。それは完全な融合、統合がもつ危険性と、完全な細分化、個人化がもつ危険性とを、ともに抑制しなければならないということである。

（山田広昭『可能なるアナキズム』による）

（注）クラン……氏族。

問二十一　傍線部1「ある一群の言語が、贈り物を表す語に対して、明らかに相手を害するものという意味を結びつけている本当の理由」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　モースが研究対象とした無償の贈与やサービスの交換に特徴づけられる「全体的給付の体系」の社会では、ビールの贈与に見られるように、ギフトは受け取り手に毒になりうるという物質的な根拠を与える以上に、物を贈る側と贈られる側を縛りつけることにより、贈る側は贈られる側に歓待の精神を示すことができるから。

ロ　人と物とが渾然一体となって絶え間なく循環する「全体的給付の体系」の社会の中でギフトが果たしているもっとも重要な機能とは、財そのものの交換やモノの流通それ自体ではなく、人と人とを結びつけることにあるため、贈り物を受け取る側は、贈る側に対する感謝の念を強要されるという不快を感じずにはいられないから。

ハ　人と物とが渾然一体となって絶え間なく循環する「全体的給付の体系」の社会の中でギフトが果たしているもっとも大事な機能とは、ビールの贈与に見られるように、物質的危害を加える可能性というよりも、財そのものの交換やモノの流通それ自体にあるため、贈り物を受け取る側は喜びと同時に不快を感じずにはいられないから。

ニ　モースが研究対象とした無償の贈与やサービスの交換に特徴づけられる「全体的給付の体系」の社会では、ビールの贈与に見られるように、ギフトは受け取り手に毒になりうるという物質的な根拠を与えるのみならず、物を贈る側と贈られる側を縛りつけることにより、贈る側は贈られる側にお返しをする義務を課すことができるから。

ホ　モースが研究対象とした無償の贈与やサービスの交換に特徴づけられる「全体的給付の体系」の社会の中でギフトが果たしているもっとも有益な機能とは、物質的危害を加える可能性よりも、人と人との紐帯の核心である財の交換やモノの流通を行うことにある以上、贈り物を受け取る側は喜びと同時に不快を感じずにはいられないから。

問二十二　傍線部2「この関係づけがすぐれて闘技的である」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　贈与は、純粋に無償で相手にモノを贈るという見かけのもと、相手を物理的に害する可能性を否定できない以上、集合的交換形態が示すように、財で相手を圧倒することで社会的階層関係を作り出しうるということ。

ロ　贈与は、贈り物を受け取った側が贈った側に贈り返すという返礼を超えて、贈り返すさいには必ず上乗せを必要とするので、双方が財を誇示して贈り合い続けることによって社会的階層関係を作り出しうるということ。

ハ　贈与は、受け取った相手がそのお返しをするという義務を相互に負う関係性を超えて、社会内の財の交換やモノの流通を際限なく行うことで互いの富を上乗せし続ける結果、社会的階層関係を作り出しうるということ。

ニ　贈与は、贈り物を受け取った相手が負債意識を払拭するために贈り返すさいに上乗せをすることが習慣化した交換体系である以上、ポトラッチのように財を贈り合い続けることで、社会的階層関係を作り出しうるということ。

ホ　贈与は、純粋に無償で示される善意という見かけのもと、実際は勝者と敗者を生み出す競合関係をそこに持ち込み、ポトラッチのように相手を常に支配し隷属させることを目指して、社会的階層関係を作り出しうるということ。

問二十三　傍線部3「階層化、序列化を生み出すメカニズムとしてのポトラッチが、生み出された階層構造に対してきわめて両義的な性格を有していること」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ポトラッチは、社会の階層構造を形成する闘技的機能を有する一方で、優位の社会階層は、ポトラッチ的形態の「全体的給付の体系」の社会においては、財の蓄積による威信の獲得が困難であるために流動化するのであり、しかも、この威信は気前の良さに反する以上、強権的な態度を敗者に取ることができないということ。

ロ　ポトラッチは、社会的優位者を作り出す闘技的機能を有する一方で、この社会的優位者の立場は、ポトラッチ的形態の「全体的給付の体系」の社会においては、財の消費による威信の獲得が容易であるために流動化するのであり、しかも、この威信は気前の良さと結びつく以上、強権的な態度を敗者に取ることができないということ。

ハ　ポトラッチは、社会的階層関係を作り出す闘技的働きをする一方で、この社会的階層関係はポトラッチのような形態の「全体的給付の体系」の社会においては、財の蓄積による威信の獲得が困難であるために流動化するのであり、しかも、この威信は気前の良さと結びつく以上、強権的な態度を敗者に取ることができないということ。

ニ　ポトラッチは、家族間、クラン間のヒエラルキーを確立する闘技的働きをする一方で、このヒエラルキーはポトラッチ的形態の「全体的給付の体系」の社会においては、財の贈与による威信の獲得が困難であるために固定化するのであり、しかも、この威信は気前の良さに反する以上、強権的な態度を敗者に取ることができないということ。

ホ　ポトラッチは、家族間、クラン間のヒエラルキーを確立する闘技的機能を有する一方で、このヒエラルキーはポトラッチ的形態の「全体的給付の体系」の社会においては、財の蓄積による威信の獲得が容易であるために固定化するのであり、しかも、この威信は気前の良さに反する以上、強権的な態度を敗者に取ることができないということ。

問二十四　傍線部4「ポトラッチに代表される闘技的贈与が、現実の戦争（殺し合い）の、文字通りの「代理物」であること」をカール・シュミットの「戦争の枠入れ」の議論との関連で説明したものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ウェストファリア条約は、戦争を権利上対等な主権国家間の正規軍同士の戦闘に限定することにより戦争を枠の中に閉じ込めるのに成功したが、闘技的贈与もまたポトラッチの当事者を限定することにより社会全体の破滅を抑止している。

ロ　ウェストファリア条約は、戦争を権利上対等な主権国家間の正規軍同士の戦闘に限定することにより絶滅戦に至る内戦の論理を予防するのに成功したが、闘技的贈与もまた闘争の手段を財に限定することにより剥き出しの暴力を抑止している。

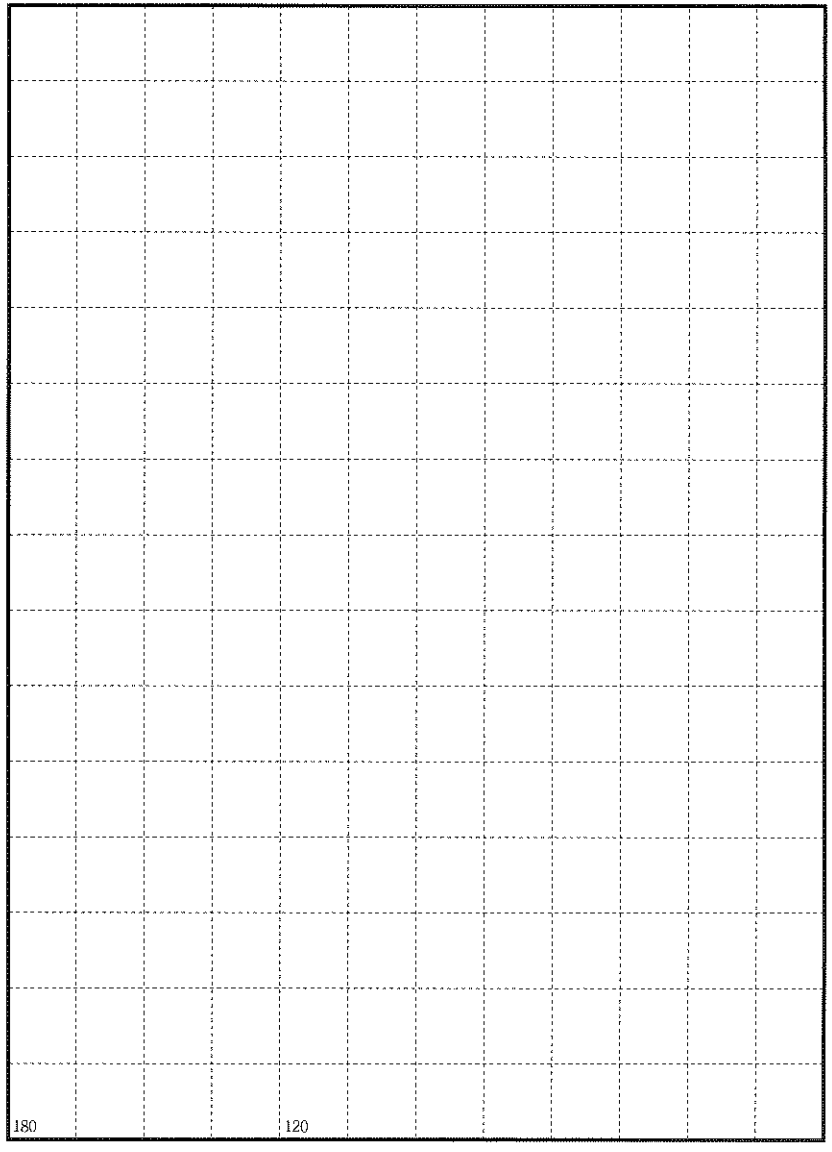
ハ　ウェストファリア条約は、戦争を内戦に限定することにより絶滅戦に至る全面戦争化の論理を予防するのに成功したが、闘技的贈与もまた戦争を共同体間のポトラッチの中に効果的に留めることにより血で血を洗う殺戮に拡大するのを抑止している。

ニ　ウェストファリア条約は、戦争を権利上対等な主権国家間の局地戦に限定することにより絶滅戦に至る内戦の論理を予防するのに成功したが、闘技的贈与もまた共同体間の紛争を解決する平和的手段にポトラッチを用いることで暴力を抑止している。

ホ　ウェストファリア条約は、戦争を権利上対等な主権国家間の正規軍と非正規軍の戦闘に限定することにより内戦という枠の中に閉じ込めることに成功したが、闘技的贈与もまた闘争の主体を限定することにより財の戦争のエスカレートを抑止している。

問二十五　傍線部5「私たちはここから贈与のもう一つのモラル（第三のモラル）を引き出してもよいはずである」とあるが、筆者がそう述べるのは、贈与の第三のモラルの萌芽が第一のモラル、第二のモラルのうちにすでに存在しているからであると思われる。そうした第三のモラルとの関係に留意しつつ、贈与の第一のモラル、第二のモラルとはどのようなものかを**一二〇字**以上**一八〇字**以内で説明せよ（解答は記述解答用紙の**問二十五**の欄に楷書で記入すること。その際、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、**必ず一マス用いること**）。

【下書き用マス目】（この下書きは回収しないので、解答は、**必ず解答用紙に記入すること**）



〔以　下　余　白〕

国語　記述解答用紙

（記入上の注意）
受験番号・氏名は下の二つの欄に記入すること。
解答は右に指定された太枠内に黒鉛筆（ＨＢ）またはシャープペンシル（ＨＢ）で書くこと。
枠外・裏面には何も書かないこと。

問二十五の解答にあたっては、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

〈2023 R05172012〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

問二十五

180　120

問十三

A

B

問十

当倍－蓰於昔人

国語採点欄

a　２５

b　２５

１３

１０

〈2023 R05172012〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。